
境界知能

教室からも福祉からも見落とされる
知的ボーダーの人たち

古荘純一著

合同出版, A5判 160頁, 1,870円, 2024年4月刊

(慶應義塾大学) 北 洋輔

本書は、昨今学術的にも社会的にも注目度が高まっている境界知能について分かりやすく綴られた一冊である。本書の構成は、境界知能の基礎的な説明から始まり、発達段階別に境界知能の子どもや成人の状態が示され、診断概念や発達障害との併存について解説がされている。

基礎的な説明では、知能や知的障害の説明に加えて、ボーダーやグレーゾーンといった社会的に使用される用語についての捉え方も述べられている。次に、発達段階別では、乳幼児期・小中学校・青年期に分けて、各時期に子どもや成人のつまづきやすい事柄や、問題に対する支援のアイデアが綴られている。本書の後半では、発達障害との関係について、客観的な数値や分かりやすいイメージ図を用いて説明がされている。

未来の読者に推薦したい本書の特徴は大きく二点である。第一に、小児科医の著者が出会った症例が多く登場する点である（個人情報観点から、複数の事例をもとにした架空事例である）。さまざまな年齢の症例が丁寧に描写されており、症例本人のことはもちろん、家族関係や学校などの周辺情報も記載されている。そのため、読者は境界知能を文字として知ることだけでなく、“人”として知ることが可能と思われる。読者の中には、境界知能の子どもや成

人に関わる人も少なくないと思われ、自身の目の前にいる子どもや成人と本書の症例の異同を考えることで、境界知能についての理解が一層深まるであろう。これらの症例紹介は、豊かな臨床経験と確かな学術知識のある著者だからこそ示すことができたものである。

第二に、本書の最後部に保護者から寄せられた質問と、質問に対する著者の回答が綴られている点である。境界知能は注目度の高さに加え、潜在的に該当する子どもが少なくないことから、読者の中にも保護者の悩みや疑問を受けることがあるだろう。この最後部では、実際に耳にすることの多い質問が並んでおり、あたかも保護者から質問を投げかけられているかのようなリアリティがある。著者の回答は、明瞭かつ具体的であり、“こうした受け答えができたらいいな”と感じさせるものである。それと同時に保護者や子どもへの配慮も忘れていない回答であり、回答を聞いた保護者はすっきりするとともに著者の温もりを感じ得るものであろう。

境界知能にかかわる基礎的な事柄、具体的な症例、保護者への回答など多彩な構成であり、本書は読者の興味に応じてどの部分から読み始めても、またかじり読みであっても満足度は高いと思われる。さらに、医療だけでなく、心理や教育、保育、福祉などさまざまな立場の読者にも優しい内容であり、ぜひ手にとって境界知能について学びを深めてほしい一冊である。
